

市民プレス

SHIMIN PRESS

10月5日 第62号

2013 年 (平成 25 年)

発行人 編集人 制作 E-mail TEL 〒353-0004

「市民フォーラム」
原 昭二
デジタル工房
hara@camelianet.com
090 (3048) 5502
埼玉県志木市本町 2-4-43

市民の目線で市民が発信する地域情報紙

WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com

「市民プレス」電子版 (無料) を公開しました
http://pr-shimin.camelianet.com
電子書籍専用のアプリケーション等で読み下さい。

CONTENTS

- PAGE 1
武家政権を確立した
この人 源頼朝 その二
- PAGE 2
平家の追討軍と戦う
平清盛の最期 頼朝は東国を支配下に
木曾義仲との交戦
- PAGE 3
平氏の追討 一ノ谷の戦い
平氏は滅亡する
義経は一転して弾劾される・・・
公文所・問注所を開く 文治の勅許
- PAGE 4
満州への旅 深瀬 克

武家政権を確立した

この人 源頼朝 その二

流人となって伊豆へ

源義朝は平治の乱で平家に敗れ、永暦元年 (1160) 二月、京都の六波羅に送られた義朝の嫡男、頼朝の処罰は死刑が当然とされた。ところが、平清盛の継母・池禅尼の嘆願などによって死一等を減ぜられ、流刑となる。

現、走湯権現 (箱根 伊豆山の山岳信仰) に帰依して読経を怠らず、亡父・義朝や源氏一門を弔いながら、頼朝は、一人の地方武士として日々を送っていた。しかしその間にも、頼朝の乳母 (比企尼) の甥に当たる三善康信 (太政官の書記官役) から、定期的に京都の情報書を得ていた。

三善康信はその後・・・

三月十一日、伊豆国・蛭島 (蛭ヶ小島ともいわれる。現・静岡県伊豆の国市四日町か?) に追放された頼朝は、流人とはいえ、乳母の比企尼や、母親、由良御前の弟に当たる祐範 (すけのり) とも読む。熱田大宮司・藤原季範の子で僧侶の援助を受け、狩りを楽しむなど自由な生活をしていったという。しかし正確な記録ではない。

何人もの側近が頼朝に仕えた

その筆頭は、比企尼の長女と結婚した安達盛長である。また敗れた源氏方だったために、所領の近江国を失い、放浪の身となった佐々木定綱ら四兄弟も、流人だった頼朝の従者として奉仕した。因みに、後の治承四年 (1180) 十月、富士川の戦いで戦功を挙げた定綱ら兄弟は、論功行賞によって、旧領の近江国佐々木庄を安堵されている。

流人として頼朝の日々は・・・

この地方の霊山である箱根権

現、走湯権現 (箱根 伊豆山の山岳信仰) に帰依して読経を怠らず、亡父・義朝や源氏一門を弔いながら、頼朝は、一人の地方武士として日々を送っていた。しかしその間にも、頼朝の乳母 (比企尼) の甥に当たる三善康信 (太政官の書記官役) から、定期的に京都の情報書を得ていた。

三善康信はその後・・・

治承四年 (1180) 五月、後白河天皇の皇子、以仁王が挙兵した二ヶ月後、彼は頼朝に使節を送り、諸国に源氏追討の計画が出されていることを伝え、頼朝の挙兵にも大きな役割を果たす。

その四年後の元暦元年四月、頼朝から鎌倉に呼ばれた康信は、鶴岡八幡宮の廻廊で対面し、鎌倉に居住役に当たっていた北条時政の長女、政子と通じる。政子は保元二年 (1151) 生まれで、そのとき二十一才、大番役のため時政が在京中のことであった。

北条政子を正妻に迎える・・・

朝から鎌倉に呼ばれた康信は、鶴岡八幡宮の廻廊で対面し、鎌倉に居住役に当たっていた北条時政の長女、政子と通じる。政子は保元二年 (1151) 生まれで、そのとき二十一才、大番役のため時政が在京中のことであった。

流刑地での自由な暮らしは・・・

フィクション性が高いとされているが、『曾我物語』に、次のような記述がある。

伊豆国伊東の豪族、伊東祐親は親平家方だったので、配流されてきた源頼朝の監視を任されていた。仁安二年 (1161) 頃、頼朝は当時二十一才だった。後に家人となる土肥実平、天野遠景、大庭景

治承・寿永の乱はじまる

治承四年五月、以仁王の挙兵

を契機として、平清盛を中心とする平氏政権に対する反乱が各地で起こり、大規模な内乱となる。元暦二年 (1181) 三月、壇ノ浦の戦いで平氏が滅亡するまで、ほぼ六年間にわたった。治承・寿永の乱という。また、源平合戦あるいは源平の戦いともいわれる。

後白河天皇の皇子、以仁王が

平氏追討を命ずる旨を諸国の源氏に発し、四月には、伊豆国の頼朝にも、叔父・源行家から令旨が届けられた。以仁王は五月、源頼政 (朝廷や摂関家近くで活動する京武士) らと共に宇治で敗死するが、頼朝はしばらく事態を静観した。このとき頼朝は三十四才、流人となって二十年が過ぎ去っていた。

頼朝は挙兵を決意する

しかし平氏が、令旨を受けた諸国の源氏の追討を企てていたのだ、自らも危ういことを悟った頼朝は挙兵を決意した。安達盛長を使者として、義朝時代から縁故をもつ東国の豪族に協力を呼びかける。すでに述べたように、安達は、源頼朝の乳母、比企尼の長女・丹後内侍を妻とし、彼女は京に知人が多かったため、京都の情勢を頼朝に伝えていた。また『曾我物語』によると、頼朝と北条政子の間を取りもつたのも安達盛長だったといわれている。

頼朝の文官としての信任

頼朝の旗揚げの直前の治承四年八月、安達盛長の推挙で頼朝に仕えた藤原邦通は、頼朝・挙兵の初戦となった山木兼隆襲撃の直前に、酒宴にかこつけて兼隆の館に留まり、周囲の地形を絵図にして持ち帰り、それを基に頼朝達が作戦を練ったという。

かつて官吏であった藤原は、有職故実や文筆に長じ、その後頼朝の下で右筆 (秘書役の文官、公事奉行)、供奉人を務めた。

伊豆を制圧したが・・・

最初の標的は伊豆国目代・山木兼隆と定められ、北条時政らは、山にある山木の屋敷を襲撃して兼隆を討ち取る。伊豆を制圧した頼朝は、北条義時 (時政の次男、土肥実平、佐々木兄弟、↓以下次頁

比企尼と頼朝との絆

鎌倉幕府の成立に深く関わりをもつた比企尼 (父母や実名は不詳) について、『吾妻鏡』には、武蔵国比企郡の代官となった夫の掃部允と共に京から下った、と記されている。

現在の埼玉県比企郡、東松山市辺りと推定される。現・川越市の北西、上戸に所在した「河越館」は隣接しているので、館の主であった、秩父党の嫡流、河越重頼と頼朝との縁結びに關わったのではあるまいか。

三女も乳母に・・・

また、比企尼が頼朝の乳母となつたのは、頼朝の実母、由良御前と都との繋がりに拠るのではないか、との推測もあり、東国に移った比企尼は、以後二十年の間、伊豆国の流人・頼朝に仕送りを行った。

平賀義信は、御家人の筆頭の座を占め、正治元年 (1200) に頼朝が亡くなった後も、源氏一門の重鎮として重きをなした。

比企尼の長女は・・・
比企掃部允と比企尼との間に男子は無く、三人の娘はそれぞれ有力御家人に嫁いだ。長女の丹後内侍は、京の二条院に女房として仕え、東国に下つて安達盛長の妻となった。のちに治承六年 (1186) 三月九日、頼朝の妻、北条政子が嫡男を懐妊した際、着帯の儀式で給仕を務めている (『吾妻鏡』: 御臺所御着帯也)。

次女の河越御前は・・・

比企尼の二女は秩父党の嫡流、河越重頼に嫁いたので、河越御前と呼ばれる。頼朝が鎌倉に拠点を構えて三年目となる寿永元年 (1200) 八月、頼朝の嫡男で、のちに将軍となった頼家が誕生

したとき、乳母として、産所の比企能員 (比企尼猶子) の邸に召され、最初の乳を含ませる乳付けの儀式を行なった。

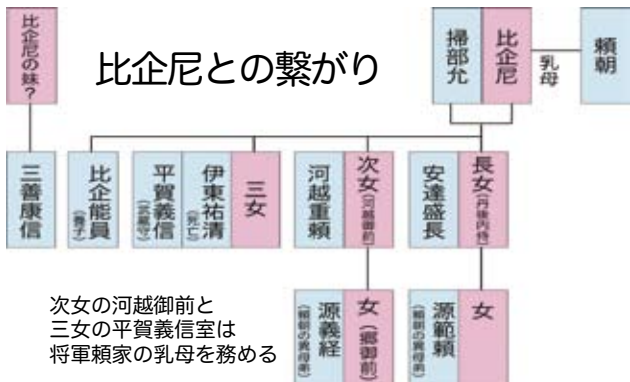
また翌々年の元暦元年 (1181) 九月には、頼朝の命によって、河越御前の娘の郷御前は、頼朝の弟・義経の正室として上洛する (『吾妻鏡』には、父親の河越重頼の家子、郎從三十騎がお供したと記されている)。

三女は、実名、通称ともに不明。伊豆国の豪族・伊東祐親の次男で、流人の頼朝と親しかった伊東祐清の室に、しかし合戦で討ち死にしたのち、平賀義信に再嫁した。

平賀は元暦元年六月、頼朝の推挙によって武蔵守に任官して守護も兼ね、善政を敷いた人物で、妻となった比企尼の三女は、次女に続いて、二代将軍・頼家の乳母となる。

平賀義信は、御家人の筆頭の座を占め、正治元年 (1200) に頼朝が亡くなった後も、源氏一門の重鎮として重きをなした。

比企尼との繋がり



源頼朝木像

文保三年 (1319) の銘あり。源頼朝は、信濃善光寺を復興した大檀那として知られ、信州・甲州の善光寺に、かつて源三代将軍堂があった。甲州善光寺蔵

天野遠景、大庭景義らを従えて、相模国土肥郷に向かい、三浦義澄、和田義盛らの三浦一族も三浦を發した。

しかし三浦軍との合流前、八月二十三日、石橋山で戦い、頼朝の軍三百騎は、平氏方の大庭景親、熊谷直実ら三千余騎、背後を塞いだ伊東祐親と戦って敗北し、土肥実平ら僅かな従者と共に山中に逃れた。畠山重忠、河越重頼、江戸重長ら平家方の大軍が三浦半島に押し寄せ、三浦一族は本拠の衣笠城で防戦するが支えることができず、城を捨てて海上へと逃亡する。また数日間の山中逃亡の後、死を逃れた頼朝も、真鶴岬から船で安房国へと脱出した。

関東平定に向かつて

八月二十九日、安房国平北郡狹島(現・千葉県安房郡鋸南町)に上陸した頼朝は、房総に勢力を持つていた上総広常と千葉常胤に使者を遣つて、加勢を要請した。九月十三日には、安房国から上総国に、さらに十七日には下総国府に向かい、下総国府で千葉一族と合流した。十九日には広常が大軍を率いて参上し、上総・千葉両氏の支持を受けた頼朝は、十月二日、太井・隅田の両河を渡る。

平家の追討軍と戦う

十月十四日、甲斐源氏が富士山麓で平家方を破り、十六日、平維盛(平清盛の嫡孫)の率いる追討軍が駿河国に達すると、頼朝は、これを迎え撃つために鎌倉を出発し、翌々日、黄瀬川で武田信義(甲斐源氏の当主)、北條時政らが率いる二万騎と合流した。二十日、富士川の兩岸で、平家の追討軍と対峙したが、その夜、武田信義の部隊が平家の後背を衝こうとした。富士沼の水鳥がそれに反応して一斉に飛び立ち、『吾妻鏡』には「その羽音はひとえに軍勢の如く」とある。これに驚いた平家方は大混乱に陥つた(吾妻鏡の記述には誇張がある)。その夜平氏軍は突如撤退し、大規模な戦闘が行なわれないうちに、頼朝は平氏を追つて上野に、頼朝は、平氏を追つて上洛するよう部下に命じた。しかし、千葉常胤、三浦義澄、上総広常らは、常陸国の佐竹氏らが未だ従わず、まず東国を平定すべきであるとの諫めのため、頼朝はこれを受け容れて、黄瀬川の宿(現・静岡県駿東郡清水町)に兵を返した。この日、源義経が頼朝の許に参じた。

義経は平泉から駆けつける

承安四年(一二七二)、十六才、元服した義経は奥州平泉へ下つた。兄・頼朝が挙兵するや、その幕下に入るべく、治承四年十月、平泉を出奔して駆けつけた。藤原秀衡(戸港西部)に人工島(経ヶ島)を築き、整備拡張した港を見下ろす山麓に、信兄弟他数十騎が同行し、富士川の戦いで勝利した頼朝と、黄瀬川によるものであった。

平重衡は南都を制圧する

清盛は、公然と反平氏活動を開始した寺社の勢力を制圧するた



源義経の肖像画

たが、重衡の四万騎は、防衛陣を突破して攻め入り、火を放つた。興福寺、東大寺の堂塔伽藍は、残らず焼き尽され、多くの僧侶が焼死した。このとき、東大寺の大仏も焼け落ちた。

治承五年(一一八五)

平清盛の最期

一方、翌年の治承五年(一一八五)に、安徳天皇の時代の年号だが、源氏方では、この元号を使用せず、引き続き「治承」を使用していた。には、肥後国の菊池隆直、尾張国に拠る源行家(義朝の弟)、美濃国の美濃源氏一党なども平氏打倒の兵を挙げ、反平氏の活動はより一層活発化した。このような中で、清盛は新体制を築こうとして、畿内近国の惣官職を置いて宗盛を任じ、臨戦体制を築いた。しかし、その混乱のさなか、熱病に倒れた。

死期を悟つた清盛は、自分の死後はすべて宗盛(清盛の三男)に任せたいことを法皇に奏上し、閏二月四日に九条河原口の平盛国の屋敷で死亡した。享年六十四才。

平氏の激しい反撃

伊予国の河野氏、近江源氏、甲斐源氏、信濃源氏が挙兵し、その年の暮れには各地で動乱が起つたので、対抗する平氏は、平清盛によつて去る六月、摂津国の福原に移された行宮(一時的な御座所)を京都に戻して反撃に転じた。

福原京の計画は...

当時、多くの反対を押し切つて福原(現・神戸市)に遷都を強行したのは、大輪田泊(現・兵庫港・神戸港西部)に人工島(経ヶ島)を築き、整備拡張した港を見下ろす山麓に、信兄弟他数十騎が同行し、富士川によるものであった。

平重衡は南都を制圧する

清盛は、公然と反平氏活動を開始した寺社の勢力を制圧するた

つづく平氏の攻撃

全国的な反乱は続き、平氏は平重衡を総大将として尾張以東の東国征伐に向かう。四月、源行家らを尾張・美濃国境付近の墨俣川(現長良川)の戦いで破り、美濃・尾張は平氏の勢力下に入った。頼朝は和田義盛を遠江に派遣するが、平氏はそれ以上は東に兵を進めず都に戻る。

頼朝の和平提案は...

一方、頼朝はその年の七月頃、朝廷に対して謀反の心は無く、

また平氏と和睦することを厭わないという趣旨の書状を後白河法皇に対して送った。しかし清盛の継室・平時子の長男だった宗盛は、清盛の遺言を理由として和平提案を拒否した。宗盛は奥州の藤原秀衡を陸奥守に任じて頼朝の牽制に期待しようだ。

源平の争いは膠着するが...

このころ、遠江国では甲斐源氏の安田義定が独立の立場をとり、奥州藤原氏の動向も定かではなかったため、頼朝は平氏と直接対峙することはなかった。

養和の飢饉

前年、降水量が極端に少なかったため、早魃のため農産物の収穫が激減し、翌年には京都を含め西日本一帯が飢饉に陥つた。大量の餓死者が発生して、地域社会が崩壊し、混乱は全国的に波及した。

鴨長明の『方丈記』をはじめ、『源平盛衰記』や『玉葉』(公家九条兼実の日記)などに、当時の状況の詳しい記述がみられる。

頼朝の嫡男誕生する

同年八月、頼朝の妻、北条政子は、嫡男の頼家を出産した。のちに頼朝の跡を継いで、鎌倉幕府第二代将軍(鎌倉殿)となる男子の誕生である。

頼朝は東国を支配下に...

寿永二年(一一八三)二月、常陸に住む叔父・源義広(志田義広)が、足利忠綱らとともに、鎌倉に対して兵を挙げた。その頃、主な御家人は平氏の襲来に備えて駿河国に在ったため、対応に苦慮した頼朝は、小山朝政らに迎撃を託し、自らは鶴岡八幡宮で東西の戦いが落着くことを祈った。

また平氏と和睦することを厭わないという趣旨の書状を後白河法皇に対して送った。しかし清盛の継室・平時子の長男だった宗盛は、清盛の遺言を理由として和平提案を拒否した。宗盛は奥州の藤原秀衡を陸奥守に任じて頼朝の牽制に期待しようだ。

源平の争いは膠着するが...

このころ、遠江国では甲斐源氏の安田義定が独立の立場をとり、奥州藤原氏の動向も定かではなかったため、頼朝は平氏と直接対峙することはなかった。

養和の飢饉

前年、降水量が極端に少なかったため、早魃のため農産物の収穫が激減し、翌年には京都を含め西日本一帯が飢饉に陥つた。大量の餓死者が発生して、地域社会が崩壊し、混乱は全国的に波及した。

鴨長明の『方丈記』をはじめ、『源平盛衰記』や『玉葉』(公家九条兼実の日記)などに、当時の状況の詳しい記述がみられる。

頼朝の嫡男誕生する

同年八月、頼朝の妻、北条政子は、嫡男の頼家を出産した。のちに頼朝の跡を継いで、鎌倉幕府第二代将軍(鎌倉殿)となる男子の誕生である。

頼朝は東国を支配下に...

寿永二年(一一八三)二月、常陸に住む叔父・源義広(志田義広)が、足利忠綱らとともに、鎌倉に対して兵を挙げた。その頃、主な御家人は平氏の襲来に備えて駿河国に在ったため、対応に苦慮した頼朝は、小山朝政らに迎撃を託し、自らは鶴岡八幡宮で東西の戦いが落着くことを祈った。

頼朝は木曾義仲と戦う

源義仲(木曾義仲とも)の生誕地は、現在の埼玉県比企郡嵐山町といわれる。源頼朝の従兄弟だが、父が頼朝の長兄に当たる源義平の襲撃を受け、武蔵国の大蔵館で殺害されたため、乳人中原兼遠のもと、信濃国の木曾で育てられた。

治承四年(一一八四)、以仁王の令旨を受けて信濃国から挙兵し、上野国に進出した。しかし義仲は、頼朝に従わぬ頼朝の叔父、源義広・行家を庇護したため、頼朝と武力衝突寸前の間柄となった。寿永二年三月、両者は話し合い、頼朝の長女・大姫の婿として、義仲が嫡子・義高(十一才)を鎌倉に送るという和議が成立した。

義仲は「俱利伽羅峠の戦い」で勝利

そのころ、飢饉が小康状態となつて、平氏は北陸の反乱勢力を討つために、平維盛(平清盛の嫡孫で、重盛の嫡男)が率いる大軍を派遣する。平氏軍は越前・加賀の反乱勢力を撃破するが、五月、加賀・越中国境の俱利伽羅峠(現・富山県小矢部市・石川県河北郡津幡町)で、義仲軍に敗北する。

頼朝の上洛を望む

七月、義仲軍は京都に迫り、都の関門、延暦寺との交渉を始めた。ついに京都の防衛を断念した平宗盛は、一門を引き連れて、福原から海路を西へ落ち延びる。義仲軍は上洛を果たしたが、期待された都の治安は改善されず、前年の飢饉のため食糧が不足し、市中では略奪や狼藉が横行する。義仲の評判は落ちて、頼朝の上洛を願う声が高まっていた。

頼朝の東国支配が公認される

頼朝は藤原秀衡と佐竹隆義に鎌倉を攻められる恐れがあること、また数万騎を率いて入洛すると、都の機能は止まってしまうであろう、として要請を断り、使者を返した。十月九日、朝廷は平治の乱で止めた頼朝の位階を復し、また十四日には、東国における荘園・公領からの官物・年貢納入を保証させるとともに、頼朝による東国支配権を公認した(寿永二年十月宣旨)。

義仲との交戦...

備中国水島(現・倉敷市玉島)で平氏に敗れた義仲は、同月十五日、頼朝の上洛を恐れて京に戻る。頼朝に宣旨を下したことを挙げて、後白河院に激しく抗議して、頼朝追討の宣旨の発給を要求する。

一方、十一月には頼朝が送つ

頼朝は東国を支配下に...

寿永二年(一一八三)二月、常陸に住む叔父・源義広(志田義広)が、足利忠綱らとともに、鎌倉に対して兵を挙げた。その頃、主な御家人は平氏の襲来に備えて駿河国に在ったため、対応に苦慮した頼朝は、小山朝政らに迎撃を託し、自らは鶴岡八幡宮で東西の戦いが落着くことを祈った。

頼朝は東国を支配下に...

寿永二年(一一八三)二月、常陸に住む叔父・源義広(志田義広)が、足利忠綱らとともに、鎌倉に対して兵を挙げた。その頃、主な御家人は平氏の襲来に備えて駿河国に在ったため、対応に苦慮した頼朝は、小山朝政らに迎撃を託し、自らは鶴岡八幡宮で東西の戦いが落着くことを祈った。

頼朝は東国を支配下に...

寿永二年(一一八三)二月、常陸に住む叔父・源義広(志田義広)が、足利忠綱らとともに、鎌倉に対して兵を挙げた。その頃、主な御家人は平氏の襲来に備えて駿河国に在ったため、対応に苦慮した頼朝は、小山朝政らに迎撃を託し、自らは鶴岡八幡宮で東西の戦いが落着くことを祈った。

頼朝は東国を支配下に...

寿永二年(一一八三)二月、常陸に住む叔父・源義広(志田義広)が、足利忠綱らとともに、鎌倉に対して兵を挙げた。その頃、主な御家人は平氏の襲来に備えて駿河国に在ったため、対応に苦慮した頼朝は、小山朝政らに迎撃を託し、自らは鶴岡八幡宮で東西の戦いが落着くことを祈った。



源義仲(木曾義仲) 像
長野県木曾郡木曾町 徳音寺所蔵

経は数万騎を率いて京に向かい、義仲軍と交戦して宇治川の防衛線を突破した(宇治川の戦い)。義仲は京都を脱出しようと図るが、六条河原の戦いで再度敗れ、北陸に向けて逃走を試みた。しかし翌廿一日、近江国粟津で源氏軍と遭遇し、義仲は顔面に矢を射られて討ち死にした。

平氏の追討 一ノ谷の戦い

義仲が滅亡するに至るまでの間に、平氏は勢力を立て直し、大輪田泊に上陸して、かつて平清盛が都を計画した福原まで進出していった。平氏は瀬戸内海を制圧し、数万騎の兵力を擁するまでに回復していた。

廿六日に平宗盛追討の宣旨が下され、京都に駐留していた範頼・義経軍は、福原に陣を構える平氏を攻撃することになった。二月(1184年3月)、範頼・義経軍は二手に分かれて平氏を急襲し(一ノ谷の戦い)、海上へと敗走させて、平重衡を捕え、京に戻った。

義高討たれて大姫は憔悴する

一方、義仲を討った頼朝は、鎌倉に在って、人質だった義高の殺害を企てた。これを知った頼朝と政子の娘の大姫が義高に伝えると、同年(改元して元暦元年)四月、義高は鎌倉を逃れる。頼朝は怒って追手を差し向け、武蔵国入間川原で義高を討った。大姫は嘆き悲しみ、憤った母の政子は義高を討った家人を梟首(さうしゅ)するが、大姫はその後憔悴を深め、後にわずか二十才で亡くなる。

平氏は屋島に御所を置く

過ぎし寿永二年十一月、源義仲に院御所・法住寺殿を襲撃された平氏は、安徳天皇と三種の神器を奉じて都を落ち、九州大宰府まで

逃れたが、讃岐国屋島に本拠を置くことができたので、ここに内裏(天皇御所)を置いた。鎌倉から平家追討に出陣する一方、一ノ谷の戦いで勝利した頼朝は、義経を自らの代官として都に残し、畿内の武士たちの掌握を図る一方、四国に逃れた平氏を追討すべく九州・四国の武士に平氏追討を求める書状を下して、土肥実平や梶原景時を山陽諸国に派遣した。

義経は一転して弾劾される...

義経の平氏追討で、侍所所司とた平氏を追討すべく九州・四国の武士に平氏追討を求める書状を下して、土肥実平や梶原景時を山陽諸国に派遣した。八月、平氏追討軍は鎌倉から出陣した。範頼を大将として、北条義時、足利義兼、千葉常胤、三浦義澄、結城朝光、比企能員、和田義盛、天野遠景ら、有力御家人がこれに従って、追討軍は京に入った。平氏追討の官符を受領して西海へと赴く。

一方の義経は、後白河法皇より左衛門少尉、檢非違使に任じられ、また、九月には、頼朝の命令で上京した、河越重頼の娘(郷御前)を正室に迎えた。その頃、義経は捕えられた平宗盛父子を伴って相模国に凱旋する。しかり頼朝は義経の鎌倉入りを許さず、宗盛父子のみを鎌倉に入れる。書状を送るが、頼朝は宗盛との面会を終えると、義経を鎌倉に入れぬまま、六月、宗盛父子と平重衡を伴って帰洛することを命じる。義経の追放に走る...

平氏は滅亡する

元暦二年(1185)一月、西海の範頼から兵糧と船の不足、関東への帰還を望む東国武士達との不和などの窮状を訴える書状が届く。頼朝は安徳天皇や建礼門院の無事のため、軍を動かさず、九州の武士から反感をもたれぬように記した書状を出し、また九州の武士には、範頼に従って平氏を討つことを求めた。

また義経は、後白河法皇に西出国陣を奏上してその許可を得ると、讃岐国屋島(現・高松市)に向けて出陣し、二月十九日、平氏を海上へと追いやった(屋島の戦い)。三月二十四日、壇ノ浦の戦い(長門国赤間関壇ノ浦は現・山口県下関市)で平氏一門は敗れ、安徳天皇は入水。平宗盛(清盛の三男)、建礼門院(清盛の娘、安徳天皇の母)らは捕えられ、遂に栄華を誇つ平氏は滅ぼされた。

都は天災に苦しむ

元暦二年(1185)七月九日、大地震に襲われた京都では、多くの建物が倒壊し、その後も余震が続いた。摂政・近衛基通(基実の子)が「近日武を以て天下を平げらる、文を以て治むるは宜しきに似るか」(『山槐記』八月十四日条)と主張し、「文治」の号が採用されて、改元が行なわれる(文治地震)。

大仏の開眼供養に行幸

文治元年(元暦二年改元)八月二十七日、後白河院は大仏の開眼供養のため、公卿・殿上人を引き連れて東大寺に御幸する。翌日の供養には多数の群集が集まり、盛大に執り行われた。鍍金されていたのは顔だけで未完成だったが(『玉葉』八月三十日条)、後白河院は正倉院から天平開眼の筆を取り出すと、柱をよじ登って自らの手で開眼を行った(『山槐記』八月廿八日条『玉葉』廿九日条)。

義経の追討はつづく

自ら出陣することを決めた頼朝は、行家と義経を討つべく鎌倉を立ち、駿河国黄瀬川に着陣した。しかし義経側には頼朝追討の兵が集まらず、彼は、郎党や行家と共に戦わずして京を落ちた。一度は海路で西国を目指したが、暴風雨に会って船団は難破し、一行は散り散りになってしまった。十一月十二日、義経の舅(正妻の父)に当る河越太郎重頼の領地が取上げられる。一部は重頼の老いた母が預かることになったが、重頼の娘婿も所領などを取上げられた。

静御前を連れて吉野に

十七日、義経は郎党や愛妾の白拍子・静御前を連れて吉野に身を隠したが、静御前が捕らえられて鎌倉に送られた。

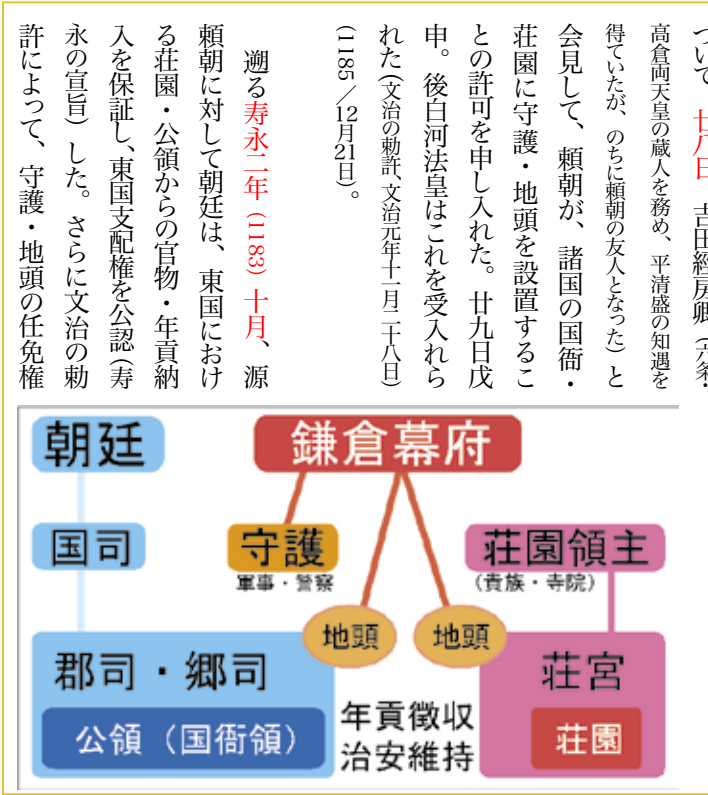
政務・財政の機構をつくる

元暦元年(1184)十月、鎌倉に「公文所」(公文は公文書で、その管理を行なう)を開き、大江広元を初代の別当に任じる。前に述べたように、頼朝の旗揚げのとき、安達盛長の推挙で初めて頼朝に仕えた藤原邦通はこのとき、新造の公文所の吉書始で吉書(最初の行政文書)を書いた。訴訟を司る問注所が開かれ、三善康信は初代執事(裁判事務の責任者)となる。この時期には、二階堂行政、平盛時から中下級の有能な官人達が才能を発揮する場を求めて鎌倉に下向するようになり、彼らが政権初期の官僚組織を形成した。

また、その前月、十月に行なわれた勝長寿院堂供養に参列を許された京吏は、広元と邦通の二人だけで、頼朝の厚い信任を受け続けた。頼朝の死後になるが、正治元年(1190)、後家の北条政子や執権・北条義時と協調して、大江は幕政に参与した。

文治の勅許

文治元年(1185)十一月廿五日、頼朝の代官として、千騎の兵を率いて入京した北条時政は、頼朝の腹心となった大江広元の献策に基づいて、廿八日、吉田経房卿(六条高倉町天皇の蔵人を務め、平清盛の知遇を得ていたが、のちに頼朝の友人となった)と会見して、頼朝が、諸国の国衛・莊園に守護・地頭を設置することの許可を申し入れた。廿九日戊申。後白河法皇はこれを受入れられた(文治の勅許。文治元年十一月十八日(1185)12月21日)。



満州への旅

深瀬 克

昭和19年（1944）生まれの私の周囲には、旧関東州、満州で生まれた友達が何人かいる。70歳を前にして『自分の生まれたところを見てみたい』という話が出た。その思いもあったが、満州は日本の明治期以降の歴史にとって重要な意味を持つ地域であり、気が置けない永年の仲間と一緒なので、良いチャンスと思って私も同行する事にした。しかし、予想通りと言おうか、厳しさばかりが印象に残る旅となっていました。

1. 「爾霊山」

「明治天皇と日露大戦争」、これは私が中学1年のころに見た映画の題名である。この映画を通して日露戦争における「203高地」・「旅順攻略作戦」・「日本海海戦」などについて知ることができた。『天気晴朗なれど波高し』とか、『皇国の興廃この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ』とか、『木口小平は死んでもラッパを離しませんでした』などの言葉を覚えたのもこの時だった。東郷平八郎率いる日本艦隊が、ロシア・バルチック艦隊を潰滅させた日本海海戦のシーンは、血沸き肉踊る思いで見えた覚えがある。

こうした思い出を胸に秘めながら、旅順口（大連市の西部）を見下ろす203高地へ登った。203高地は標高203mのゆるやかな山である。大変蒸し暑かったので観光客相手の小型バスで登ることも考えたが、先人たちが苦勞して攻めた山なので、敬意を表して歩いて登る事にした。中腹には、4km先の旅順口に向かって28cm砲が据え置かれていた。旅順口に停泊しているロシアの戦艦を攻撃した大砲である。（但し、当時使用した現物ではない。）頂上に登ると日本軍が建てた砲弾をかたどった忠魂碑があり、『爾霊山』（二〇三）と書かれていた。二人の息子をこの戦争で亡くした乃木希典大將が漢詩を作り、その中で203高地を「爾霊山」として残されていた。『偽満皇宮博物院』の入口には、3カ国語による説明文が長々と表示されていた。こなれていない日本語だったが、概略次のような内容であった。



し、ラストエンペラー愛新覺羅溥儀が即位した。しかし現在の中国は、満州国は日本が作った傀儡であって独立国としては認められない、との立場をとって、『偽満州国』と呼んでいる。満州国の首都であった新京は現在長春市となっており、ここには当時建てられた建築物が、『偽満州国務院（国会議事堂）』・『偽満州国軍事部』・『偽満皇宮博物院』などとして残されていた。『偽満皇宮博物院』の入口には、3カ国語による説明文が長々と表示されていた。こなれていない日本語だったが、概略次のような内容であった。

3. 戦勝記念日

8月15日は中国では「戦勝記念日」であり、各職場で記念式典が行っているらしく、丁度その場に出くわした。『偽満皇宮博物院記念抗日戦争勝利68周年系列活動』・『勿忘国恥、振興中華、樹愛國之情、立報國之志、世界要和平、人類要發展』などのスローガンが大きく掲示されており、戦時中の日本で叫ばれていたスローガンと似ているなど感じた。集まっていた100名前後の人たちにはペットボトルの飲み物が配られ、彼らは普通に談笑していた。間もなく式典が始まる場所であったが、万1トラブルが発生する事を懸念し、急いでその場を離れた。



偽満皇宮博物院の入口



戦勝記念式典会場

4. 満州の夕日

ある民族と国家が外来侵略者により存続の危機に面したとき、犠牲を惜しまず勇敢に戦い民族の英雄になった人もいれば、民族を裏切つて哀れを乞い、民族の犯罪者に新幹線に、ハルビン（哈爾濱）から

長春まで乗った。車体には「和諧号」と書かれている。対外政策と異なり、国内的には「和諧」を求めていることが単純明快だった。

満州の新幹線にはトンネルは全く無く、大きな鉄橋も無く、両側に延々と広がるトウモロコシ畑の中をただひたすら走るのみであった。線路がカーブする事も無く、時速の表示は最高307kmになっていた。だが、揺れもほとんど無く、不安を感じするような事も皆無であった。丁度夕日が地平線に沈むのが車窓から見えた。その夕日は、ギンギンギラギラしたものではなく、ヨード卵の黄身色をした月のように見えた。この



新幹線「和諧号」

満州からの引揚船が出港したのは胡蘆島であったと、満州生れの2人は両親から聞かされてきた。大連港から帰国しても良さそうに思えるが、当時大連はソ連が占領していたため使用できず、やむなく胡蘆島経由になったのだそう。今回の旅行における最後の訪問地と示している通貨の換算表には、どなった胡蘆島港は、大連がある遼東半島の西側にある遼東湾の北西部にある港で、昭和21年（1946）から23年までの間に、ここから105万人あまりの日本人が、文字どおり命からがら引揚船に乗って帰国した。S君は母親から、『胡蘆島の港には赤ん坊の死体が浮いていた』と聞かされたという。

『ここは御国を何百里 離れて遠き満州の 赤い夕陽に照らされて 友は野末の石の下』
この歌の時代の夕日はどのような見えただろうか。

5. 中国の病院

旅の途中、S君が階段で蹴躓き、脛の骨が見えるほどのケガをしてしまったので、大きな病院の救急外来に飛び込んだ。受付事務も順調に進み、第1次診察で応急処置を行った上、急診科縫合室に行つた。ここで傷口の周囲に麻酔を打ち、ゴミを除去し消毒をした後、4針縫った。その後アレルギーの検査のための注射をして安全を確かめた後、破傷風予防の注射を打つた。この間待たされることはほとんど無く、掛かった時間は2時間だった。最後に支払った医療費は約200元、日本円に換算するとわずか3400円。健康保険による診療でもないのに、この金額で済んだことに驚くと同時に、さすが共産主義国家の医療費だなあと感心した。アメリカでこれだけの治療を受けたら、とてもこんな金額で済まないことは確かである。皆さん、ケガをするなら中国で！

6. 胡蘆島港

満州からの引揚船が出港したのは胡蘆島であったと、満州生れの2人は両親から聞かされてきた。大連港から帰国しても良さそうに思えるが、当時大連はソ連が占領していたため使用できず、やむなく胡蘆島経由になったのだそう。今回の旅行における最後の訪問地と示している通貨の換算表には、どなった胡蘆島港は、大連がある遼東半島の西側にある遼東湾の北西部にある港で、昭和21年（1946）から23年までの間に、ここから105万人あまりの日本人が、文字どおり命からがら引揚船に乗って帰国した。S君は母親から、『胡蘆島の港には赤ん坊の死体が浮いていた』と聞かされたという。



胡蘆島の海水浴場

7. 円と元

通貨の単位は、日本は「円」、中国は「元」であるが、ホテルに表示している通貨の換算表には、どなたも「¥」マークが表示され、複雑し、複雑な思いの最終訪問地であった。

1日借り切ったワゴン車の運転手は、『胡蘆島市内の案内はするが、海岸まで案内するとは契約していない』と主張し、追加料金を大声で要求してきた。中国語の堪能なY君も負けずに大声でやりあうが、聞き入れようとしなない。日本への悪感情が遠因かとも思い、Y君に無理しないようにと伝えた。結局行つた所は胡蘆島港ではなく、近くの海水浴場であった。現在胡蘆島港は中国海軍の原子力潜水艦寄港地（2013. 8. 12〜17）